

第29回徳島県芸術祭主催行事

第50回記念 徳島県美術展

第1期 平成7年11月11日(土)～18日(土)
第2期 平成7年11月20日(月)～26日(日)
会場 徳島県郷土文化会館

■ 第1期 / 書道(前期11月11日～14日 後期11月15日～18日)
■ 第2期 / 日本画・洋画・写真・彫刻・美術工芸・デザイン

主催 / 徳島県美術家協会・徳島新聞社・徳島県芸術祭執行委員会

第50回記念

〈平成7年度〉

徳島県美術展

作品集

日本画
洋写彫美術工芸道
書デザイン

主催

徳島県芸術祭執行委員会
徳島県美術家協会・徳島新聞社

後援

NHK徳島放送局・四国放送・徳島県文化協会



第50回徳島県美術展に寄せて

徳島県芸術祭執行委員会会長・徳島県知事

圓 藤 寿 穂

第50回徳島県美術展が開催されますことを心からお慶び申し上げます。

ご承知のとおり、今年は、戦後50年という歴史の大きな節目の年でもあります。50回を数える徳島県美術展は、これまで戦後の日本、そして徳島の発展とともに歩んでこられ、この間、美術の総合公募展として、本県の芸術文化の発展に果たした功績は、誠に大きいものがあります。

また、県では、芸術文化に関わる県民の方々の意欲的な発表を促し、優れた芸術文化に接する場として、徳島県芸術祭を昭和42年度から開催いたしておりますが、徳島県美術展は、この芸術祭の主催公演(行事)として、第1回から開催され、「県展」として広く県民に親しまれておりますことは、誠にご同慶に耐えない次第でございます。

郷土の文化に根ざし、郷土の人々に愛され、親しまれる芸術文化活動や催しが本県の文化水準を高める基盤であることは言を待ちません。

近年、経済の発展とともに、心の豊かさやゆとりが求められております。県では今後とも、文化遺産を大切にし、徳島から発信できる独自の文化を創造し、育む、豊かな文化環境を形成することに取り組んで参りますが、芸術活動の主役は言うまでもなく県民一人ひとりでございます。

「県展」に参画されている皆様方のますますのご活躍をご期待申し上げます。次第であります。

終わりに、本県の芸術文化の振興にご協力をいただいております徳島県美術家協会、徳島新聞社並びに「県展」の開催にご尽力を賜っております皆様方に厚くお礼申し上げますとともに、今後ますますのご発展、ご活躍を心からお祈り申し上げます、お祝いの言葉といたします。

平成7年11月



県展50年を祝す

県美術家協会会長

佐野比呂志

県展（徳島県美術展）50年、まさに誇りうる偉大な歴史である。まず心から祝福する。昭和20年、暗い長い戦争の終結と同時に、県美術家たちの平和と美への切実な願望は大きな活力となって、昭和21年秋11月戦災のツメ跡もまだ生々しい中、第1回県展が開催された。開催にいたる経緯については、当時徳島新聞社文化部蒲池正夫部長を中心とした美術家たちの多大な尽力によるもので、徳島新聞社前川静夫専務、さらに商工会議所原菊太郎会頭両氏が動き、深い理解のもと、終に成功することになったと言われる。その後紆余曲折の時代もこえて、今日の輝かしい50年の歴史を見ることになった。

県展が徳島県美術文化のために、いかに甚大な功績をつみ重ねてきたかは、改めてかくまでもなく、県民ひとりひとりの胸の中に深く認識されていることであろう。特に現在活躍しているほとんどの作家の心の底には、県展から受けた恩恵の大きさは、生々しく存在して離れることはないと確信する。

県展の明快な運営の一つとして、県外作家の審査により、しかも公開審査を第1回展から続けてきたことである。しかも審査員のメンバーが、日本の超一流作家で、決して肩書などにこだわらないで選考する。これは各部門選考委員の見識の高さによるものと考えている。

県展は、こうして名誉ある50年の歴史を作ることになったが、これは何よりも県展を愛する出品者の情熱と誠意、そして観覧者諸氏の支援のたまものと深く感銘する。さいごに県美術家並びに、県民諸氏とともに県展永遠の存続と発展を祈念して、祝いの言葉とする。



21世紀へ新たな出発点に

社団法人徳島新聞社 理事社長

坂 田 雄 幸

徳島県美術展は回を重ね、今年で第50回を迎えました。第1回展は徳島市内が焦土と化し、戦災のツメ跡が色濃く残る昭和21年秋でした。以後、半世紀にわたって継続され、現在のように盛大な展覧会に発展できたのは県内美術愛好者の情熱、県民の芸術・文化に対するご理解の賜ものと、感慨を新たにしているところです。

今でこそ、県内最高の総合公募展といわれていますが、スタート当時は、洋画、日本画、写真の3部門のささやかな展覧会だったと承っております。敗戦直後の混乱期、衣食住に事欠く時代でした。そのような中で、県内美術愛好者をはじめ徳島新聞社の諸先輩たちが、県民から広く寄付を募り、やっとの思いで開催にこぎつけたともうかがっております。先人たちのご熱意とご苦勞のかいあって、期間中に5万人余の県民が詰め掛けたといえますから、ただただ驚き、頭が下がる思いでいっぱいです。

展覧会場は、現在の県郷土文化会館に至るまで、今は懐かしい丸新百貨店、憲法記念館、栄屋、徳島市民会館と移り変わってまいりました。この間、出品作品も年ごとに増え、レベルの向上も目を見張るばかりです。県内の美術愛好者が、この展覧会を舞台にして美を競い合い、その時代を刻む作品とともに、心に残る思い出も合わせて作り上げてきたことと思います。ある人にとって「青春時代そのもの」であったり、さらに深く関わった人にとっては「生涯のパートナー」であったのかもしれませんが、この展覧会が多くの県民に親しまれているのは、こういった方々の大きな支えがあったからこそと実感しております。

私ども主催者は、今回の第50回記念展を単なるセレモニーに終わらせるつもりはありません。県美術家協会関係者の皆さん方とご相談しながら様々な課題を解消し、21世紀の世代につなげる素晴らしい徳島県美術展に仕上げなくてはならないと決意を固めております。

審査員

(敬称略)

①住所 ②所属団体・役職名 ③経歴・受賞歴など。



【日本画】 下田 義寛

①東京都港区北青山②日本美術院同人・評議員③東京芸大大学院修了、山種美術館大賞、院展総理大臣賞など受賞。



【書道】 尾崎 邑鵬

①大阪府八尾市久宝園②日展理事、日本書芸院副理事長③日展文部大臣賞、日本芸術院賞などを受賞。



【洋画】 三栖 右嗣

①埼玉県比企郡玉川村玉川②無所属③東京芸大卒、沖縄海洋博協賛「海を描く現在絵画コンクール」展大賞、安井賞受賞。



【書道】 井茂 圭洞

①神戸市北区桂木②日展会員、京都教育大名誉教授③日展会員賞など受賞。



【写真】 奈良原 一高

①東京都渋谷区神宮前②日本写真家協会③早大大学院修了、芸術選奨文部大臣賞、毎日芸術賞など受賞。



【書道】 大井 錦亭

①東京都三鷹市上連雀②創玄書道会常務理事、日展会員③毎日書道展準大賞、日展特選など受賞。



【彫刻】 古島 実

①東京都杉並区永福②国画会会員、愛知県立芸大教授③東京芸大卒、国際具象展招待のほか、尾張旭市城山公園彫刻の森のアートディレクターなどを担当。



【デザイン】 松永 真

①東京都杉並区松庵②日本グラフィックデザイナー協会理事、多摩美大客員教授など③東京芸大卒、毎日デザイン賞、ワルジャワ国際ポスタービエンナーレ金賞・名誉賞、芸術選奨文部大臣新人賞など受賞。



【美術工芸】 島田 文雄

①埼玉県川口市飯塚②日本工芸会、東京芸大助教授、伝統工芸新作展審査員③東京芸大大学院修了、伝統工芸新作展日本工芸会長賞など受賞。

審査員総評



〈写真〉

審査員 奈良原 一 高
(日本写真家協会)

五十年の伝統ある展覧会にふさわしく、高い水準の作品がそろった。特に、表現力が要求されるモノクロの写真が多かったのは、カラーに偏りがちな他県と比べると異例のことで、出品者の写真に対する情熱と愛情を感じた。

また、題材も型にはまらずバラエティーに富んでいた。こうした中で、画面を通してその背後から何かを感じ取れる作品を選んだ。答えがはっきりしている写真よりも、疑問や問いかけのメッセージが込められた作品が魅力的ではないだろうか。

五十回記念大賞の佐治孝「光景」は、砂浜に撮影機材だけを残すというフィクションの世界。作者はこの自昼夢をあっけらかんと作為を感じさせずに描き切っている。明るい画面だが、見方を変えれば、全く逆の暗い作品とも読める。生と死のような二重の世界がこの中にはある。写真そのものをテーマとすることで、作者の写真に対するアイロニーが感じ取れる。

県知事賞の川端武夫「花火の日」は、偶然の面白さをとらえた作品。しみりとしたお通夜に、花火という劇的な要素が瞬間的に加わったことで、映画のセットのような不思議な画面に仕上がっている。

特選の井上憲治「あそびつかれて」は、アングルや被写体への迫り方がうまく、リアリティーにあふれた作品。子供の寝顔を魅力的にとらえている。坂東進「吉日」には写真が呼吸している新鮮さがある。画面からすっきりした空気が伝わってくる。色彩的にも優れている。宮本幸治「夏」(二枚組み)は、画面の背後にまさに夏を感じさせる作品。蛇口から垂れている滴が画面を引き立てている。



〈彫刻〉

審査員 古 島 実
(国画会会員)

全国的に見ても、そんな色のないレベルだ。入選者と落選者を分けるのに身を切られる思いだった。

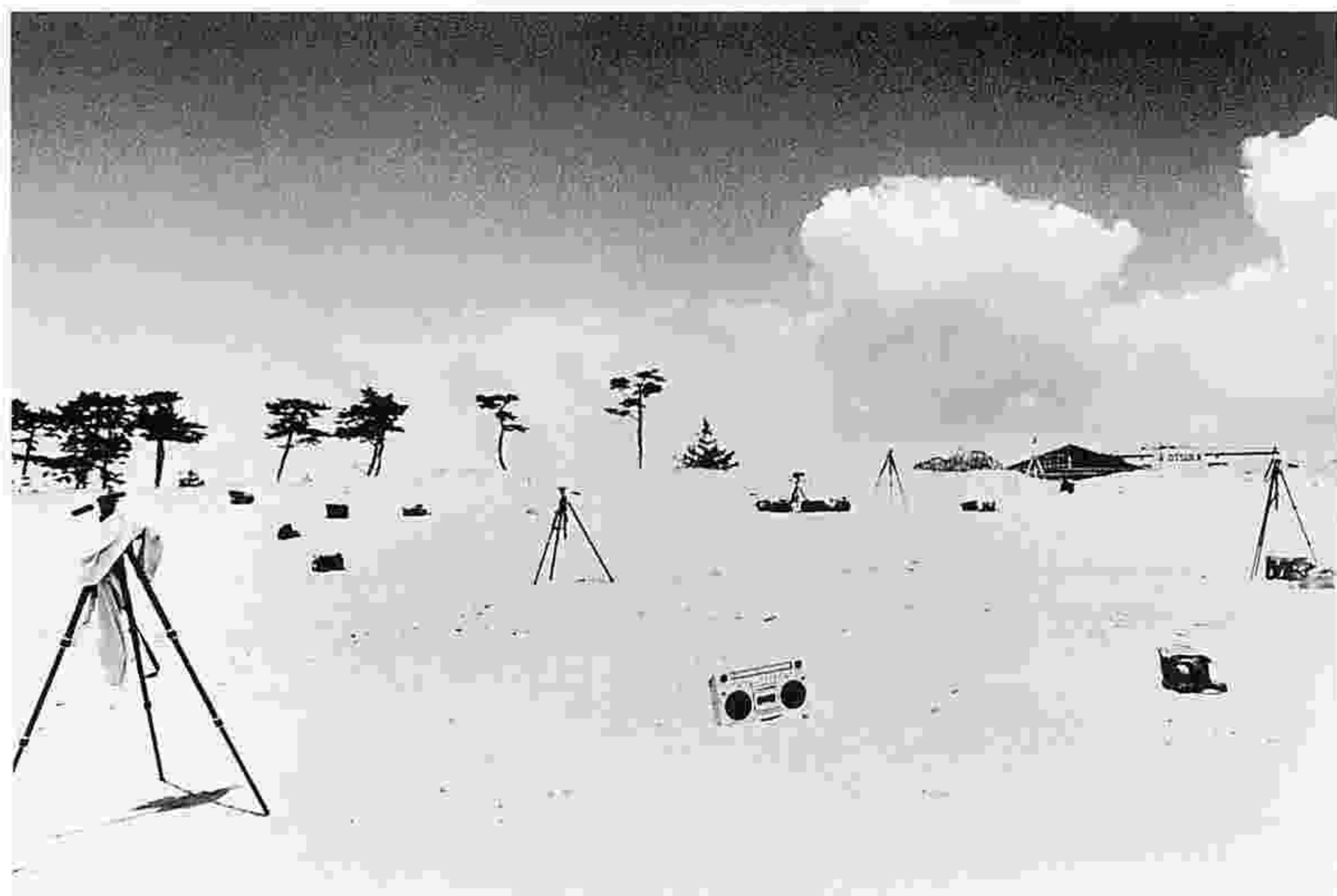
あえて課題を上げるなら、具象はそれなりに仕上がっていたが、小さくまとまった作品が多かったこと。もっと大きく、かつ大胆に表現してもいいのでないか。抽象は作品の密度にもっとこだわってほしい。素材に鉛を使うなど、新しい試みの作品がいくつかあったが、素材に目を奪われ、今一つ訴えるものに欠けていたのは残念。

審査のポイントとしては具象、抽象ともに、まず基本的なデッサン力、構成力を重視した。特に具象は作品の良しあしがそこではっきり分かれた。その上で作者の感性と彫刻の持つ感覚的な重さ、重厚さがいかに感じられたかということだ。

記念大賞の居上真人「オシャレな三人組」は、石の中からうまく作品を掘り出している。最初によほどしっかりとデッサンしていないとできないものだ。修正のきかない素材に対し、打ち込んだ真剣さが伝わってくる。それが重厚さを生み出したのだろう。発想もユニークで作者の感性が存分に感じられた。

県議会議長賞の蒔田寿「構築されたもの」は木をうまく組み合わせることにより、文字通り構成の面白さを表現している。ただ、木は継ぎ足しが自由で、修正がきくためイメージ的な軽さがある。不必要な飾りもやや目立ち、その辺を解決することが今後の課題だろう。

写真



特選・第50回記念大賞 光景 佐治 孝

写真



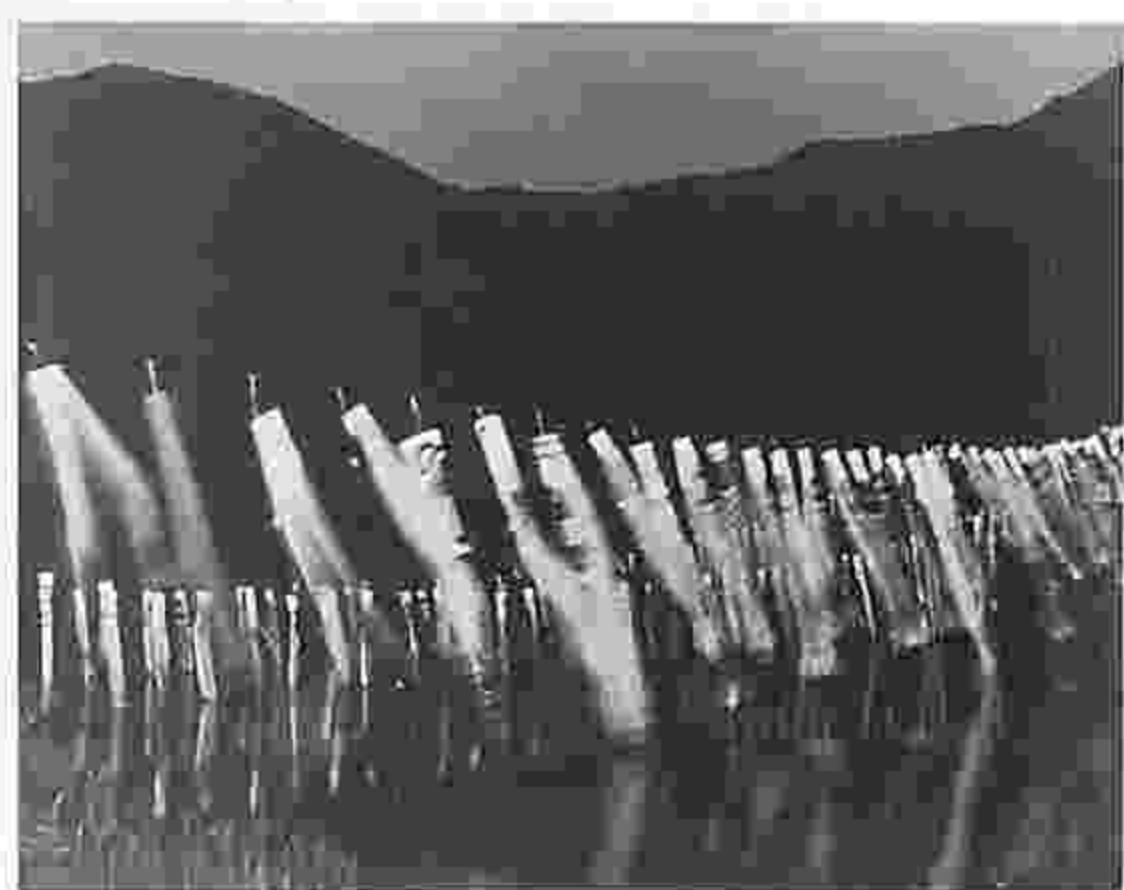
特別出品 紫陽花の咲く頃 福島 正仁



招待 驟雨 増田 清次



招待 晩夏 井上 光雄



招待 眠らない鯉 木田 英之



招待 倉敷雨情 西條 征二



招待 プロローグ 勝西 雅夫



招待 墓参50年 藤井 梵



招待 錦秋 武内 亨



招待 秋空 笹田 敏雄



招待 炎暑 榑淵 魏



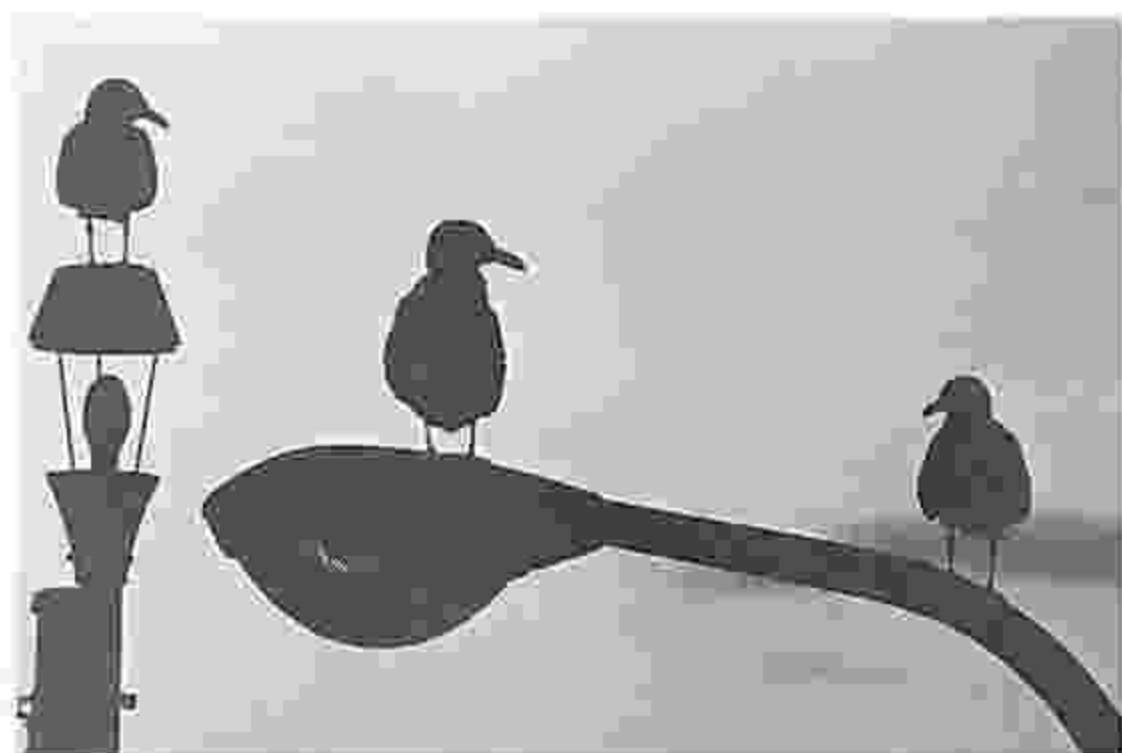
招待
サギノーの初夏
酒井 博司



招待 精霊の森・屋久島 三好 和義



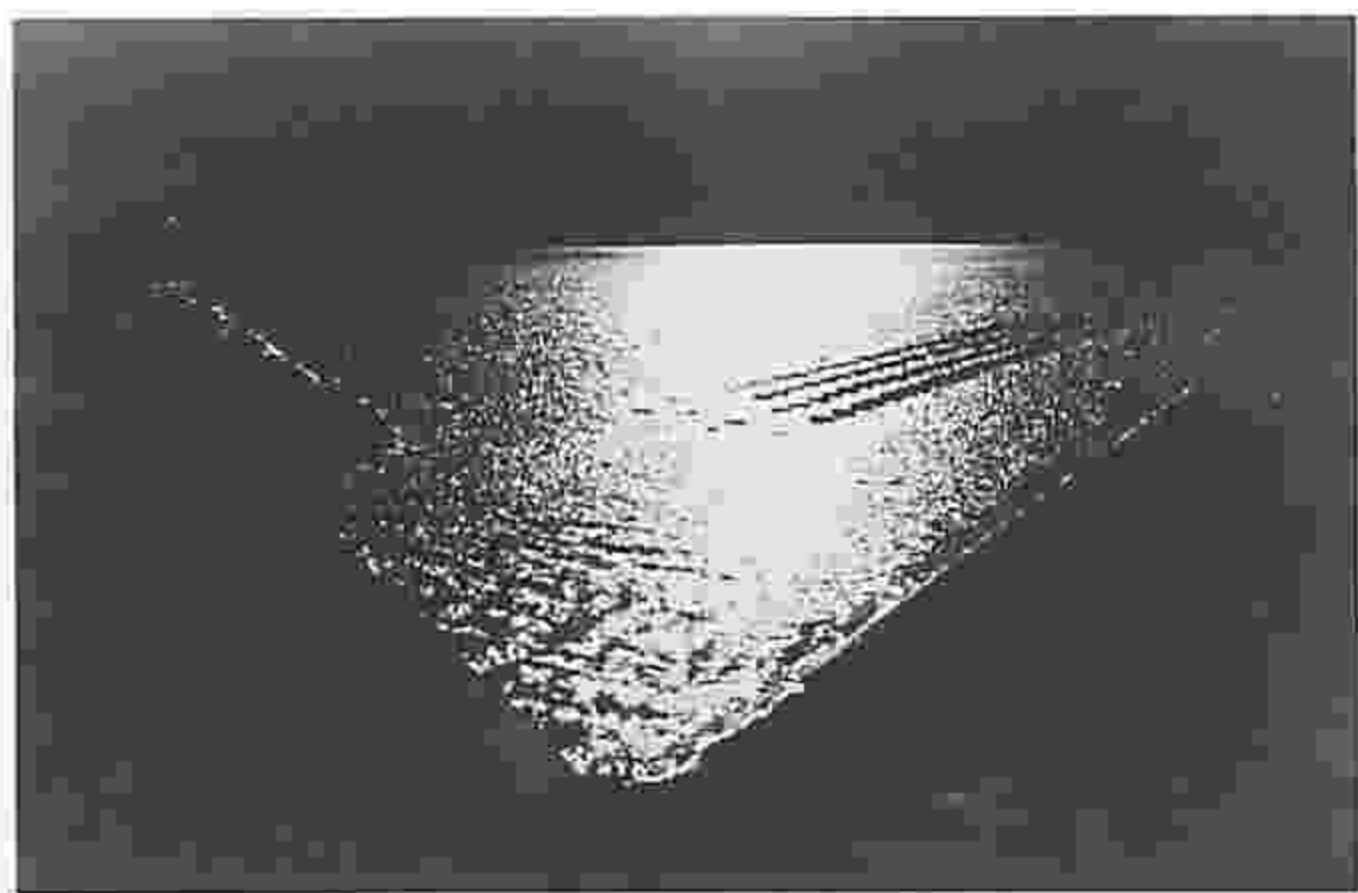
招待 霧の吉野山 上野 照文



招待 たそがれ時 森 賢一



招待 童子 橋本 圭祐



招待 冬風 安長 剛



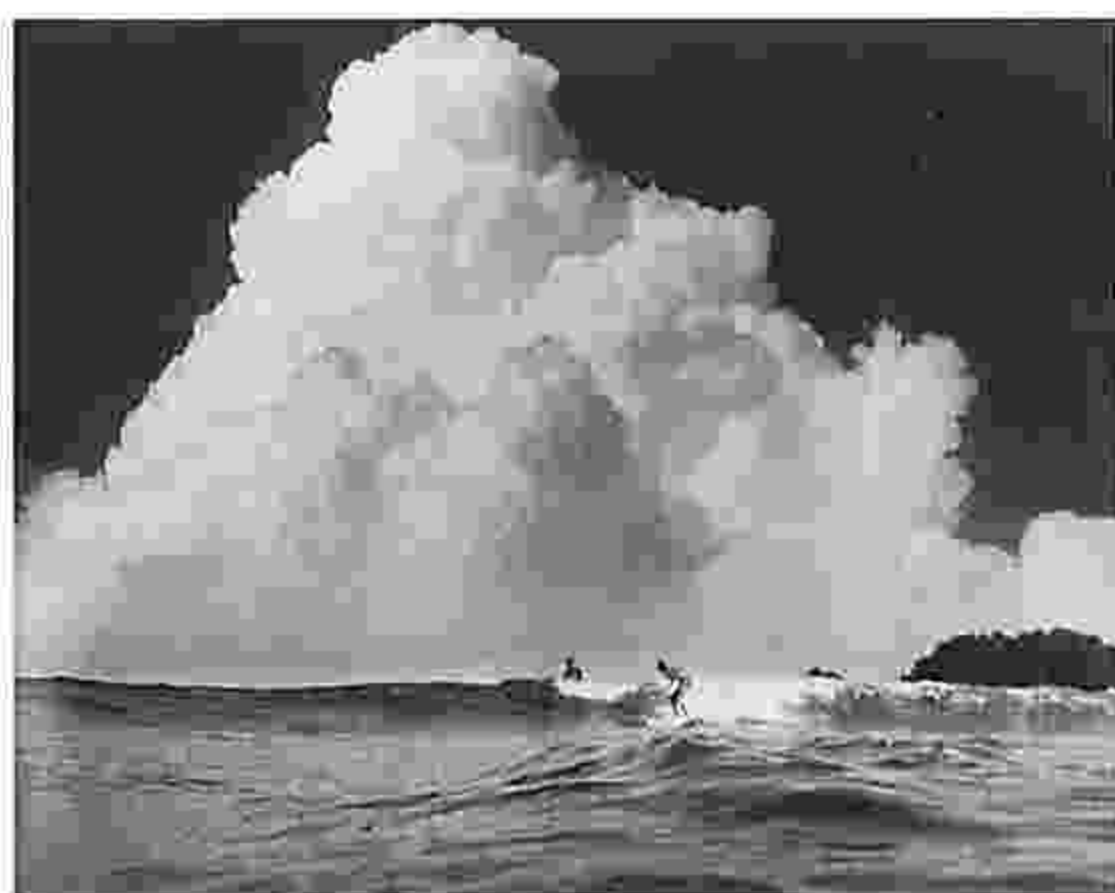
招待 霧氷林 前浦 芳久



招待 少年 荒井 賢治



招待 浜辺の詩 林 敏彦



招待 夏日 多田 晴美



無鑑査 豊漁 中野 建吉



無鑑査 蓮華 古井 謙吉



特選・徳島県知事賞 花火の日 川端 武夫



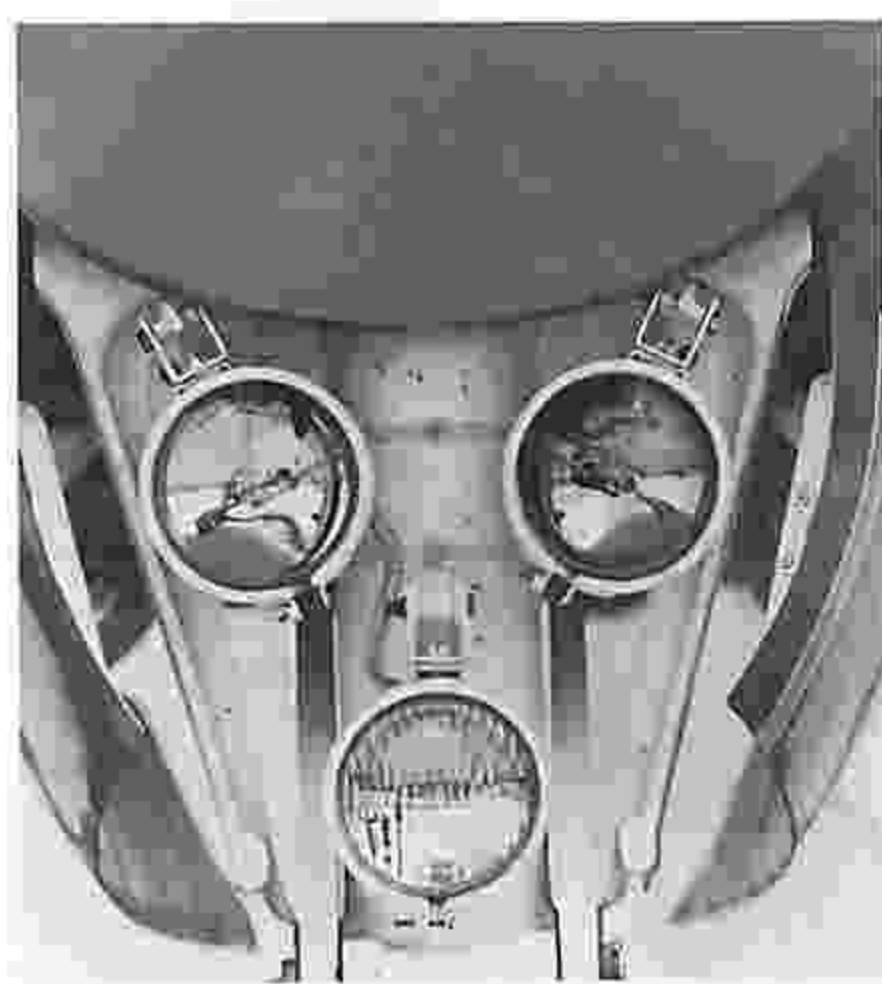
特選
吉日 坂東 進



特選 あそびつかれて 井上 憲治



特選 夏(2枚組) 宮本 幸治



準特選

赤いヘルメット

井上

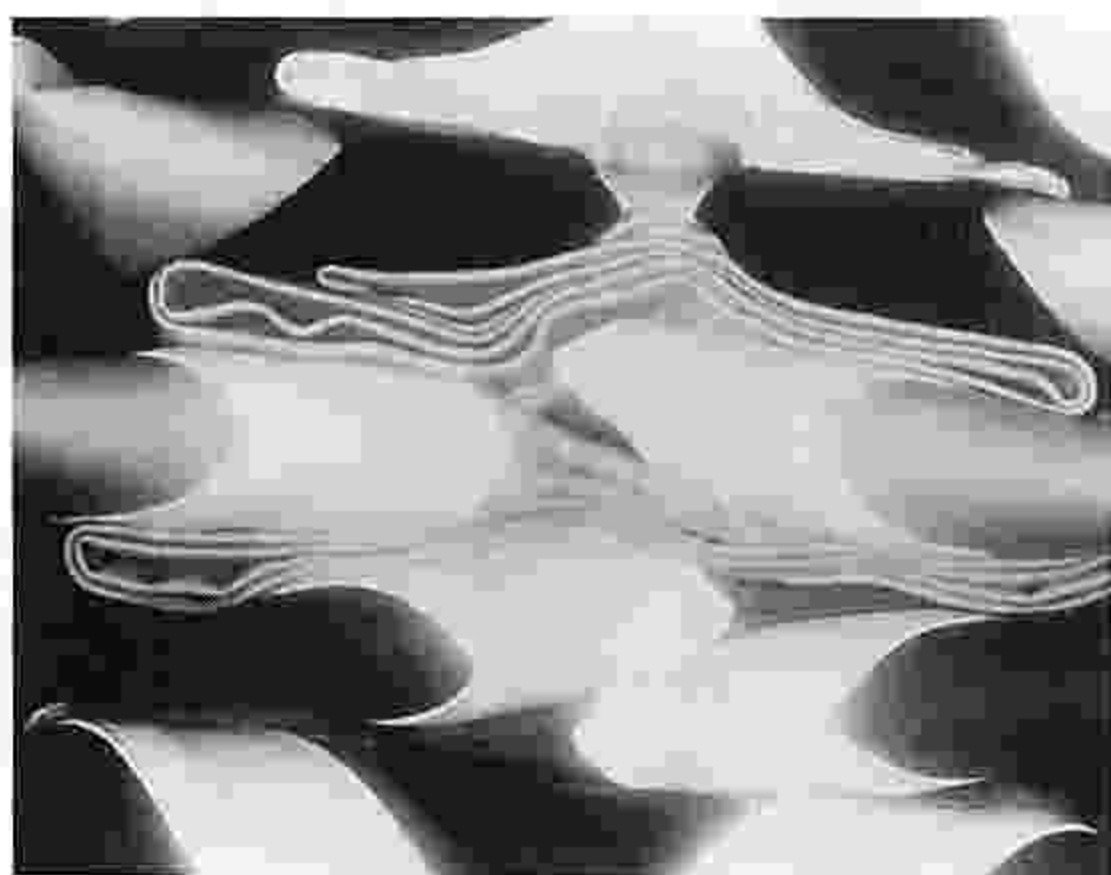
翔



準特選 休日 大野 武



準特選 酷暑 野藤 敏美



準特選 不思議な光景 武知 良和



準特選 子供歌舞伎（2枚組） 清水 宗保





準特選 夜夢 田村 泰弘



準特選
年頃
赤木 昭子



準特選 保育所の夏（2枚組） 佃 利美

第50回記念県美術展出品・入選等状況

区分		部門	日本画	洋画	写真	彫刻	美術工芸	書道	デザイン	計
出品数			65	301	1,243	41	196	1,371	144	3,361
人数			56	213	228	31	127	800	98	1,553
入選	率		60.0%	39.5%	24.9%	61.0%	54.6%	41.0%	44.4%	36.4%
	記念大賞		1	1	1	1	1	1	1	7
	特別賞		1	1	1	1	1	1	1	7
	特選		3	4	5	2	3	7	3	27
	準特選		3	4	8	2	3	13	3	36
	入選		33	111	296	21	101	542	58	1,162
	計		39	119	309	25	107	562	64	1,225
落選	率		40.0%	60.5%	75.1%	39.0%	45.4%	59.0%	55.6%	63.6%
	落選		26	182	934	16	89	808	80	2,135
招待等	招待		10	9	19	5	10	40	2	95
	無鑑査		1		2		1	2		6
	特別出品		1	3	1	1	1	4	1	12
	賛助出品		6	13		1	2	1	1	24
	計		18	25	22	7	14	47	4	137
展示数			57	144	331	32	121	609	68	1,362

※記念大賞・特別賞は特選の内数である。